

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベ ンチスト教会 - 第九号

Jeff Pippenger

2025-12-11

九番

ヨエル書の序論もここまで来たので、最初の8つの記事のいくつかの要点を手短にまとめ、これからヨエル書そのものをより直接的に取り上げるにあたって何を期待すべきかを明らかにし、そしてもちろん、それがダニエル書11章11-16節にあるラフィアとパニウムの戦いとどのように関係するのか？

私たちは「ぶどう園の歌」に重点を置いてきた。というのも、預言的には「経験」は「歌」によって表されるからである。十四万四千人の特徴の一つは、彼らがモーセと小羊の歌を歌うことであり、それはイザヤのぶどう園の歌を表現するヨハネ流の言い方にすぎない。すべての主要な預言者は、その書をイスラエルの反逆を糾弾する言葉で書き始める。言い換えれば、すべての主要な預言者はまずぶどう園の歌を歌っていると言える。私は、ヨエル書一章におけるぶどう園の歌が、この主題に関する最も重要な啓示の一つだと主張する。私が正しいかどうか断言はできないが、そう確信する理由は、ヨエル書に象徴的に示された預言的な連関が、鍵、あるいは複数のスポークを支える中軸のように見えるからである。ヨエルの証しは、他の並行する筋と結び付くだけでなく、とりわけ、一章でぶどう園が破壊されるという象徴、そして続く二つの章で、アメリカ合衆国における獣の像の試みの時と世界における獣の像の試みの時の双方を指し示すことによって、参照点を定めているように思われる。そしてそれはすべて、ぶどう園という文脈の中に置かれている。雨が降らなければ、ぶどう園は生きたぶどう園とは言えない。

私たちはまた、「いつまでか？」という象徴で表される預言期間にも重点を置いてきました。以前に確立されたこの「いつまで」に関する原則を思い起こさせる必要があると感じたのは、かつてもそうであり、今もなお土台であり隅のかしら石でもある「頂石」に重点を置くためでした。現在進行中の「真夜中の叫び」のメッセージの最終的な完全な展開こそが、その「頂石」です。土台の上に据えられたその頂石は、初めよりも十倍も明るく輝くミラーの宝石です。

神の「驚くべきみわざ」に基づけば、冠石とは、神の民がラオデキア的経験からフィラデルフィア的経験へと移行する時であり、その時こそ彼らが「七に属する八」となり、また「戦う教会」から「勝利の教会」へと移行する時である。この移行こそが冠石である。神の民が「冠石」のメッセージを聞き、見て、それが彼らの目に驚くべきものと映るとき、この移行は成し遂げられる。冠石のメッセージはクライマックスである。というのも、それが象徴的な「冠石」の諸真理をすべて一つに結び合わせるからである。「七たび」のメッセージはミラーの礎石であり、ミラー派の冠石となるはずのものだった。ペンテコステがペンテコステの季節の冠石であったのと同様に、「真夜中の叫び」も第一と第二の天使のミラー派運動の冠石であった。

キリストが第一と第二の天使のミラー派の神殿を建て上げた46年間の時期の頂点、すなわち冠石は、十四万四千人の神殿を建てるというキリストの働きのための礎石となるはずであった。その礎石は天への道を照らす光として1844年に据えられた。ゆえに、世の終わりに生きる神の民は安息を見いだすために「古き道筋」へ立ち帰るべきなのである。彼らがミラー派の草創期の歴史に立ち帰るなら、真夜中の叫びのメッセージこそが、その土台の歴史の頂点であったことに気づく。真夜中の叫びは、聖霊の注ぎ出しの現れであった。魂が「古き道筋」に立ち帰り、その道の初め、すなわち土台となる地点に据えられた「明るい光」を見いだすとき、人は真夜中の叫びを見いだす。それをエレミヤは「安息」と呼んでいる。

彼らは道の始まりで、自分たちの背後に明るい光を据えていたが、それは天使が私に「真夜中の叫び」だと告げたものだった。この光は道全体にわたって輝き、彼らの足もとを照らして、つまづかないようにした。

彼らの目の前におられて都へと導いておられるイエスから目を離さなければ、彼らは安全であった。だがまもなく、何人かは疲れ、都ははるか遠くにあり、自分たちはもっと前にすでにそこへ入っているはずだと期待していたと言った。そのときイエスは、栄光に満ちた右の御腕を挙げて彼らを励まされ、その御腕から光が出て再臨の一団の上を揺らめきながら覆い、彼らは「ハレルヤ！」と叫んだ。ところが、ほかの者たちは軽率にも背後の光を否定し、ここまで自分たちを導いたのは神ではないと言った。すると背後の光は消え、彼らの足もとは全くの暗やみとなり、彼らはつまづいて目標とイエスを見失い、道から外れて下の暗く邪悪な世へと落ちていった。『エレン・G・ホワイトのキリスト教的経験と教訓』57頁。

ミラー派の歴史の集大成は、十四万四千人の歴史の礎石である。1798年の三天使の始まりから、日曜法において聖所の清めが成就して勝利の教会が起こされる時に至るまで、その道は真夜中の叫びのメッセージによって照らされている。というのも、そのたとえばアドベンチズムについてであり、日曜法の危機のさなかに人類の恩恵期間が閉じられる中で、神がご自分の品性を完全に反映する民をいかにして起こされるかを扱っているからである。

道の上で、イエスが先導しておられ、その栄光の右腕を上げて道を照らし続けておられる。したがって、道の始まりには明るい光があり、道の終わりへと導く明るい光もある。アルファでありオメガであるイエスは、初めをもって終わりを示しておられるので、道の両端にある光は真夜中の叫びのメッセージである。

1798年に第一の天使が到来し、彼の裁きの時が到来したと告げ、「…彼の裁きの時が来た」と言った。裁きの時は1798年に来た。そしてそれが始まると、キリストと彼の新しい花嫁-フィラデルフィアのミラー派アドベンチズム-との結婚が始まった。キリストは1844年10月22日に結婚することになっており、1798年から1844年までの間に花嫁は整えられた。花嫁はフィラデルフィアのものであった。というのも、キリストの花嫁には非難がなく、彼女は自らを整え、純潔であったからである。裁きの告知とは、1798年に始まり、1844年に終わりに至った結婚の告知にほかならない。

ミラー派運動にとっての基礎の光と頂石の光とは、婚姻を告げ知らせるメッセージすなわち「真夜中の叫び」のメッセージであった。真夜中の叫びは、第一と第二の天使の歴史およびミラー派の歴史の基礎であり頂石であった。また、ミラー派の歴史の頂石は、十四万四千人の歴史にとっては頂石であると同時に礎石でもある。神殿の建設は頂石が据えられると完成し、その最後の「驚くべき」石を据える働きは2023年7月に始まった。

さまざまな預言の成就がその集大成を形作るが、この集大成はまた、メッセージのクライマックスも表している。ペンテコステは、ペンテコステ期のメッセージの集大成であった。ちょうど、1856年にハイラム・エドソンの筆を通してもたらされた「七つの時」の光が、ミラーのメッセージに対する本来意図された集大成であったのと同様である。というのも、ミラーが最初に見いだした基礎的真理は「七つの時」だったからだ。1856年に、その集大成の真理に関する新しい光を退けることは、古代イスラエルが四十年の間にそうしたように、ラオデキアの荒野で死ぬことを選ぶのと同義であった。これは2023年7月を1856年、すなわちミラー派の歴史におけるフィラデルフィアからラオデキアへの転換点として、また、十四万四千の歴史におけるラオデキアからフィラデルフィアへの反転として特定するものだ。キリストは1844年に不純な女と結ばれたのではない。彼女はフィラデルフィアの者であり、主は日曜法の時にフィラデルフィアからの花嫁と結ばれるからである。しかしまず、彼女は自らを整えなければならない。あなたは備えができていますか。

恐れるな、小さき群れよ。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからだ。ルカの福音書 12:32

1844年10月22日、主は、ご自身に従って第三天使の歴史と第三天使が表すすべての事柄の中へ入るべく整えられた花嫁と婚姻を結ばれた。しかし1863年までには、第三天使の歴史はラオデキアの荒野へと逸れてしまった。1844年から1863年に至る歴史は第三天使の期間を表しており、したがって、十四万四千人の封印の時期における愚かな乙女たちの一つの例証を与えている。乙女たちは、天使によって象徴されるメッセージによってより分けられつつある麦と毒麦である。というのも、分離の働きを行うのは天使だからである。

そのとき、私は第三の御使いを見た。私に付き添っていた御使いが言った。「彼の働きは恐るべきものである。彼の使命は畏るべきものである。彼は、麦を毒麦から選り分け、天の穀倉のためにその麦に印をし、あるいは束ねる御使いである。これらの事柄は、心のすべて、注意のすべてを占めるべきである。」『初期の著作』119頁。

黙示録十四章の三天使のメッセージは、二つの階級を分け、結びつける後の雨のメッセージである。

教会の歩みの中における、深く心を揺さぶる光景がヨハネに示された。彼は神の民の立場、危険、闘争、そして最後の解放を見た。彼は、地の収穫を熟させるための最後のメッセージを記している。すなわち、それは、天の倉に納められる穂束となるか、滅びの火にくべられる薪束となるかを決定づけるものである。彼には非常に重大な主題が啓示された。とりわけ、誤りから真理へと立ち返ろうとする者たちが、目の前にある危険と闘争について教えられるように、終末の教会のために、地上に何が起ころうとしているのかについて、誰ひとり暗闇の中にいる必要はない。『大争闘』341頁。

この時代に「収穫を熟させる終末のメッセージ」となり、人々を二つの群に分けるのは、「真理の言葉」である。その働きはまた、ミラーの夢に出てくる「塵払いの男」の働きでもある。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人と同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心になくなっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁。

1844年の大失望から始まり、1863年までの道しるべや出来事は、9/11から日曜法に至る歴史を表している。なぜ1844年が9/11なのか、と問うのだろうか？

ホワイト夫人の著作は、1844年10月22日に第三天使が到来したこと、さらに1888年にも到来したことを明確にしており、その1888年は9/11を予表している。さらに重要なのは、すべての預言者が9/11から日曜法に至るまさにその歴史を特定しているという点である。ゆえに、これは二人か三人の証言ではなく、神の言葉のすべての証人の一致した証言によって、9/11から日曜法までの期間こそが「すべての幻の成就」がなされる時期であることが示されている。

第三の天使の到来と終結の歴史は1844年から1863年にわたり、9/11から日曜法に至るまでの神の驚くべき御業の時期を表している。その歴史は1840年から1844年によっても表されており、その系列では1840年がアルファ、1844年がおメガである。1844年から1863年の系列では、1844年がアルファ、1863年がおメガである。1844年はアルファでもありおメガでもある。

十字架は1844年に符合し、アルファでありおメガである方は十字架でご自身の血を流された。9/11（1840年）から、黙示録10章が、1840年にヨハネが小さな巻物を食べることから始まり、1844年に彼の腹に失望が生じるという歴史を提示していることが分かる。食べることが始まりで、腹が終わりを示す。第10章の最後の節は、その歴史が十四万四千人の歴史において繰り返されることを表している。

そこで私は、その小さな巻物を天使の手から受け取り、食べてしまった。するとそれは、口には蜜のように甘かったが、食べ終わるやいなや、腹は苦くなった。彼は私に言った。「あなたは、多くの民と国と言語と王たちの前で、もう一度預言しなければならない。」黙示録 10:10、11

黙示録第10章とハバクク書第2章は、1840年から1844年までの預言的期間を証する二つの章である。1844年から1863年に至る歴史は、失望という節目から始まり、その後には離散があり、さらにその後には再集合が続く。その期間に、ハバククの二つの表に関する預言史

は、第二の表が1849年に印刷され、1850年に広く公刊されたときに完結した。ハバククの表の時期は、1843年の図表が公刊された1842年5月からであり、その預言的期間は、始まったのと同じく、ハバククの二つの表の一つの公刊をもって終わった。1843年の図表はアルファであり、1850年の図表はオメガである。

1856年、ハイラム・エドソンは一連の記事を執筆し、ウィリアム・ミラーの「七つの時」に対する理解を新たな段階へと引き上げた。エドソンの業績はミラーの業績のオメガであり、神の民を力づけることを意図した集大成の位置へとミラーの土台となる真理を据えた。「七つの時」に関するミラーの光はアルファであり、「七つの時」に関するエドソンの光はオメガであった。

1863年、その運動は、やがて自らの内部から新たな運動を生み出すことになる教会へと変わったが、それは、ミラー派がプロテスタントから出てきたのと同様に、弟子たちがユダヤ教からキリスト教へと出てきたのと同様であり、さらにヨシュアとカレブが荒野で死ぬ運命にあった以前の契約の民から出てきたのと同様であった。

まさに同じ歴史（1844年から1863年）において、地の獣の共和党の角は、最終的に南北戦争へと発展する並行する闘争を経ている。歴史家は皆、南北戦争は1863年、リンカーンの奴隷解放宣言によってその中間点に達したことで一致している。リンカーンは最初の共和党大統領であり、その時点までの歴史上最悪の民主党大統領の後に大統領就任の宣誓を行った。彼は後に暗殺された。これらの預言的特徴やその他のものは、最後の共和党大統領にも繰り返される。

1844年から1863年に至るまでには、散らしと集めが含まれていた。1863年は日曜法を表しているので、1844年に起こった散らしは、ラオデキアのセブンスデー・アドベンチストがラオデキアの荒野へと散らされる1863年までの唯一の散らしである。1844年は散らしを生み、1863年も散らしを生んだ。ゆえにその歴史が特定された預言的象徴であることを証している。というのも、それは1844年のアルファの散らしで始まり、1863年のオメガの散らしで終わるからである。最初の散らしは2020年7月18日に到来し、最後のオメガの散らしは日曜法において成就する。

やがて、私たちは分かたれ、散らされ、同じ尊い信仰を持つ者たちとの交わりという特権なしに、私たち一人ひとりが自ら立たなければならない時が来ます。神があなたの傍らにおられ、神があなたを導いておられることをあなたが知っていなければ、どうして立っていられるでしょうか。Review and Herald, 1890年3月25日。

ただ神が「あなたのそばに」いてくださるだけでは十分ではない。あなたはまた「彼があなたを導いておられることを知る」必要がある。この事実は、預言の主題であり、「あなたがたは主を知るようになる」ときに基づくさまざまな言い回しによって表されている。

あなたがたは豊かに食べて満ち足り、あなたがたの神、主の御名をほめたたえる。主はあなたがたに驚くべきことをしてくださったからだ。わたしの民は決して恥をこうむることはない。あなたがたは、わたしがイスラエルのただ中にいること、また、わたしがあなたがたの神、主であって、ほかにはいないことを知る。わたしの民は決して恥をこうむることはない。... このようにして、あなたがたは、わたしがシオン、わが聖なる山に住むあなたがたの神、主であることを知る。そのとき、エルサレムは

聖なるものとなり、もはや異邦人はその中を通らない。ヨエル書 2:26、27、3:17。

エルサレムが聖なるとき、それは凱旋の教会である。というのも、戦う教会とは小麦と毒麦が共に混在する教会だと定義されているからである。そして、「もはやよそ者がエルサレムを通り過ぎることはない」とき、神の民は「彼が率いて導いておられる」ことを「知るであろう」。彼らが知るの、彼らが「七度」の祈りを成就した者たちだからであり、その祈りには、ラオデキア人としては神があなたを導いてはおられなかったと告白することが含まれている。しかし、あなたがフィラデルフィア人へと変わるときには、「彼が率いて導いておられる」こと、そして神が「イスラエルのただ中におられる」ことを知るだろう。

4月19日のアルファの離散（失望）と10月22日のオメガの離散（失望）は、10月22日の大失望の後に出された最初の公式な出版物によって示されている。出版はミラー派の歴史とアメリカ合衆国の預言的歴史における預言的な標識であるため、1844年以後に公式に出版された最初の出版物はその歴史の道標であり、その道標は離散を指し示している。

1847年—国外に散らされた残りの民

『小さな群れ』への一言

以下の記事は『The Day-Dawn』のために書かれたもので、同紙は O. R. L. Crosier によってニューヨーク州カナンデイグアで刊行されてきた。しかし、その新聞は現在では発行されておらず、再び発行されるかどうかもわからないので、メイン州にいる私たちのうちの何人かは、これらをこの形で公にするのが最善だと考えた。私は「小さな群れ」の注意を、まもなくこの地上で起こる事柄に向けたたい……。

読者は、E・G・ホワイト夫人の筆による三篇の文章が『A Word to the 'Little Flock.'』に収められていたことにお気づきであろう。……

「14～18ページに収められているホワイト夫人の第二の書簡は、『To the Remnant Scattered Abroad』という題のもとに、彼女の最初の幻の記述である。これは1845年12月20日にイーノック・ジェイコブズ宛ての私信として書かれ、受取人によって1846年1月24日号の『The Day-Star』に初めて掲載された。ついで1846年4月6日には、ジェームズ・ホワイトとH・S・ガーニーによってブロードサイド形式で再印刷された。『A Word to the "Little Flock"』に掲載された本文は、細かな編集上の変更と聖句参照の追加を除けば、初出時に印刷された幻の全文の記述と同一である。」James White, A Word to the 'Little Flock', 25.

1844年は、天使の到来と失望を画した年である。1845年に最初の幻視が書き記され、1846年に出版された。最初の幻視は「四方に散らされた残りの者たち」に宛てられている。未婚の10代の女預言者が最初の幻視を書き記したとき、「残りの者」の預言的特質の一つ、すなわち十四万四千人の特徴の一つとして、預言的必然により彼らが『方々に散らされる』ことになるのだということを、彼女が知っていたとは私は思えない。1846年、二人は結婚し、これによりエレンの姓はホワイトとなった。同年、ホワイト夫妻は第七日安息日を守り始めた。1846年には契約は最終的に確定したとされ、1844年に始まった預言的な婚姻は1846年に成就し、1847年には最初の公式刊行物が印刷されて郵送された。

1850年5月

親愛なる読者よ—この論評における私の目的は、聖なる真理の光に照らして誤りを明らかにすることでした……

「この小著を散らされた群れに捧げるにあたり、この点において私は彼らに対する務めを果たした。どうか神が祝福を加えてくださるように。アーメン。」 James White, *The Seventh-day Sabbath not Abolished*, 2.

ジェームズ・ホワイトの刊行物は、彼の聴衆が依然として散らされた群れであったことを示すと同時に、第七日安息日を弁護するものでもある。これは、安息日と第三天使についてのミラー派アドベンチズムの理解における、第三天使のメッセージの萌芽段階の姿である。それは1850年の図表が刊行されたのと同じ年に出版され、両者は、迫り来る日曜法の危機に備えて主の軍勢が起こされることを象徴している。イエスは常に初めをもって終わりを示される。1844年に1843年の図表を用いてメッセージを提示した人々は、1850年の図表を用いてメッセージを提示することになる人々の型を示していた。ハバククの二つの表の期間の初めには、人々はハバククの表と結びつけて時になかったメッセージを宣べ伝えており、1850年にはジェームズ・ホワイトが1850年の図表とともに第三天使のメッセージを提示している。その図表は1849年頃にニコルズ兄によって作成されたが、その頃ジェームズとエレン・ホワイトはニコルズ兄とともに暮らしていた。ジェームズ・ホワイトは1850年の図表の制作に直接関与しており、その年に第三天使のメッセージの宣教を開始した。

[1850年]9月23日、主は、御自分の民の残りの者を回復するために二度目に御手を伸ばされたこと、そしてこの集めの時には努力を倍加しなければならないことを私に示された。散らしの時にはイスラエルは打たれ、引き裂かれた。しかし今、集めの時には、神はご自分の民を癒し、包み治してくださる。散らしの時には、真理を広めるための努力はほとんど効果がなく、ほとんど何も成し遂げられなかった。しかし、神がご自分の民を集めようと御手を伸ばされたこの集めの時には、真理を広める努力は所期の効果を挙げるだろう。すべての者はこの働きにおいて一致し、熱心であるべきである。私は、今の集めの時に私たちを律する規範として散らしの時を引き合いに出すのは、誰にとっても恥ずべきことだと見た。というのは、もし神が今、当時以上のことを私たちのためになさらないなら、イスラエルは決して集められることはないからである。真理は、説教されるのと同様に、紙上で公刊されることも同じくらい必要である。Review and Herald、1850年11月1日。

「74ページにある、主が『ご自分の民の残りの者を取り戻すために、再び御手を伸ばされた』という見解は、キリストを待ち望んでいた人々の間にかつて存在した一致と力だけを指し、また、主が再びご自分の民を一つにまとめ、奮い立たせ始められたという事実を指しているにすぎない。」『Early Writings』86ページ。

『初期の著作』でホワイト姉妹は、「レビュー・アンド・ヘラルド」誌の一節について注釈し、彼女が預言者イザヤの言葉を用いて「主はご自分の民の残りの者を回復するために、ふたたび御手を伸ばされたことを私にお示しになった」と語ったことと関連づけている。主は1850年に御手を伸ばされた。1844年10月22日に主が彼らを至聖所に集められたとき、それは紀元前677年から1844年10月22日まで続いた散らしの終結であった。文字

どおりの栄光の地に住む文字どおりのユダは、紀元前677年にレビ記26章の「七たび」に一致して2520年間散らされた。2520年の終わりにあたる1844年10月22日に霊的イスラエルは集められたが、ただちに散らされ、そしてその散らしが終結したのは、主が二度目に御手を差し伸べられたときである。主はこの箇所、二つのことを成し遂げるために二度目に彼らを集められる。すなわち「ご自分の民を束ねる」と「ご自分の民を起こす」ことである。

そのとき私は第三の天使を見た。私に同行している天使が言った。「彼の言葉は恐ろしく、その使命は畏るべきものだ。彼は、毒麦の中から麦を選び分け、天の倉のためにその麦に印をし、あるいは束ねるべき天使である。」これらの事柄には、心のすべて、注意のすべてを注ぐべきである。さらに私は、私たちが今や最後のあわれみのメッセージを受けていると信じる者は、日々新たな誤りを受け入れ、あるいは吸収している者たちから分離している必要があることを、再び示された。若い者も年老いた者も、誤りと暗闇の中にある者たちの集会に出席すべきではないのを見た。天使は言った。「益のない事柄に思いをとどめるのをやめよ。」『マニユスクリプト・リリース』第5巻、425頁。

1850年に始まった第二の集めは、彼らが旗印として掲げられ「高く上げられる」ときに神の民が封印（結びつけ）されることを予表している。1850年は、主が十四万四千人を集める時を示している。予言的な必然として、彼らは集められる前に散らされていなければならなかった。したがって、黙示録11章11節の「三日半」は1260を象徴しており、それは2520の半分で、2020年7月18日以後に起こった散らしを表している。黙示録11章11節は、十四万四千となる者たちの第二の集めと、イザヤ書11章11節に示されているとおりに諸国に掲げられる旗印を表している！

その日には、エッサイの根が現れ、民の旗印として立つ。異邦人はそれを求め、その安息は栄光に満ちる。

その日には、主は再び、二度目に、御手を伸ばして、アッシリヤから、エジプトから、パテロスから、クシュから、エラムから、シンアルから、ハマテから、そして海の島々から、残されるご自分の民の残りの者を取り戻される。

彼は諸国のために旗を掲げ、イスラエルの追いやられた者を集め、地の四隅からユダの散らされた者を寄せ集める。イザヤ書 11:10、11、12

1850年に、主は、ハバククのものによって表された真夜中の叫びのメッセージと結びつけて第三天使のメッセージを宣べ伝えていた人々を集めるために、再び御手を伸ばされた。2023年7月にも、主は、ハバククのものによって表された真夜中の叫びのメッセージと結びつけて第三天使のメッセージを宣べ伝えていた人々を集めるために、再び御手を伸ばされた。1850年も2023年7月も、イザヤ書11章11節に記されている「その民の残りの者」の集めを指し示している。11節は10節と12節に挟まれており、そのどちらの節も世界に旗印を掲げること示している。

三つの節のそれぞれは旗印を指し示しているが、その中間の節は彼らを「残りの者」として示している。そこに言う残りの者は再び集められ、彼らが集められる部族の数は八つである。「8」は、死を見ることなく旧世界から新世界へと移ったノアの箱舟の中の者た

ちを表すだけでなく、「8」は、七つの教会のうちの第八の教会に当たる者たちも表している。黙示録11章11節の二人の証人は、復活した者たちである。「8」という数は復活の象徴であり、十四万四千人の象徴であり、洗礼の象徴であり、ラオデキアからフィラデルフィアへと移行して諸国へのイザヤの旗印となる者たちの象徴でもある。主は1850年から1865年にかけて二度目に御手を伸ばし、さらに2023年7月にも御手を伸ばされた。

2023年には、1856年のときと同様に、七つの時に関して新たな光が与えられた。1856年から1863年までの期間は、主がご自身の残りの民を軍として起こされるときの十四万四千人の歴史を表している。

イザヤ書11章11節はヨハネの黙示録11章11節と完全に一致しており、それはダニエル書11章11節とも完全に一致している。イザヤとヨハネは内的な歴史を描き、ダニエルは外的な歴史を描いている。ダニエル書11章11節の外的な系統はヨハネの黙示録11章11節の内的な系統と並行しており、イザヤ書11章11節は、外的な系統から神のほかの群れを呼び出す内的な系統の旗印を示している。パルモニはこれらの箇所を見事にひとまとめに結び合わせたが、これは万物の創造主であるお方にしか成し得ないことである。

これらの内容は次回の記事で続けます。

人工情報との対話：

数学界では、数「11」に何か特別な意味はありますか？

はい、11という数には、単に素数であるというだけでなく、数学的に興味深く意義のある点がいくつもあります。数学者や数学愛好家がよく挙げる主なものは次のとおりです。

11は5番目の素数で、最小の2桁の素数であり、10進法における最初の回文素数である。「11」は最小のレピュニット（同じ数字の繰り返しから成る数で、素数であるもの）である。同じ数字が2桁に並ぶ2桁の素数はこれだけである。11、22、33、44など。成り立つのは「11」だけである。「11」はメルセンヌ素数の指数である。 $1/11 = 0.090909\dots$

の10進展開は循環節がわずか2だが、 $1/11$ は別の意味でも有名である。素数列

11、101、1009、10007、100003などは、等差数列における素数の議論に現れる。位数22の二面体群（正11角形の対称群）は注目に値する。というのも、「11」は、その二面体群が群論で関心を集める非可換で中心が自明な構造をもつ最小の素数だからである。理論物理学（弦理論/M理論）では、宇宙はしばしば11の時空次元でモデル化され、その分野で働く物理学者や数学者は11の現れについてたびたび言及する。「11」は偶数桁の回文素数としては唯一のものである（2より大きい偶数桁のほかの回文数はすべて11で割り切れるため合成数である）。これはレクリエーション数学における定理である。

結論：

「11」は、 π やe、黄金比ほどのスーパースター的な地位こそないが、多くの現象で最小例または最初の例として繰り返し現れる（最初のレピュニット素数、唯一の偶数桁の回文素数、多くの証明や反例における早期の出現、M理論における11次元、など）。だから、確かに、数学界では11は重要な数だと見なされている。

御言葉に靈感を与えた方こそ、御言葉の真の解説者であった。キリストは、聞く人々の注意を自然の単純な法則や、彼らが日々見たり手にしたりしている身近な事物に向けさせることで、教えを例証した。こうして彼は、彼らの心を自然界から霊的なものへと導いた。多くの者は、彼のたとえの意味をすぐには理解できなかったが、偉大な師が霊的真理を結びつけて示した対象に日ごとに触れるにつれ、ある者は、彼が心に刻もうとしていた神の真理の教訓を悟り、彼の使命の真実を確信して福音へと回心した。サバス・スクール・ワーカー、1909年12月1日。

「このようにして自然界から霊的な王国へと導きつつ、キリストのたとえ話は、人間を神と、地を天と結ぶ真理の鎖の輪である。」『キリストの実物教訓』17頁。